

日本文学全集

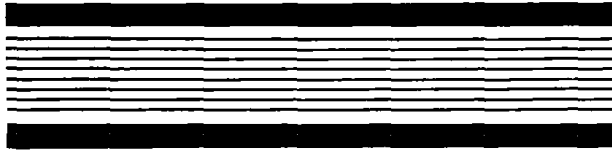
49

中村真一郎・福永武彦
堀田善衛

死の影の下に・扇
忘却の河
広場の孤独・鬼無鬼島

河出書房

中村真一郎・福永武彦・堀田善衛



カラー版日本文学全集 49

1971©

昭和四十六年 四月二十日 初版印刷
昭和四十六年 四月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者

中村真一郎
福永武彦
堀田善衛

発行者

中島隆之

印刷者

草刈龍平

装幀者

亀倉雄策

本文印刷

中央精版印刷株式会社

口絵印刷

凸版印刷株式会社

製本

加藤製本株式会社

製函

加藤製函印刷株式会社

本文用紙

本州製紙株式会社

クローズ

日本クローズ工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331149-0961

目次

中村真一郎

死の影の下に……………五

扇……………一〇三

福永武彦

忘却の河……………一九

堀田善衛

広場の孤独……………三三

鬼無鬼島……………三七

	注	年	積
解 説			
卷頭写真			
色刷挿絵			
死の影の下に	小久保実		三〇
忘却の河	小久保実		三六
広場の孤独	源 高根		三三
鬼無島	久保田芳太郎		三〇
	小久保実		三七
	榎本良介		
	林 敬二		
	田村文雄		
	中本達也		

中村真一郎

死の影の下に*

かくて黒き死の運命は彼等を引き行く……

ホメロス*

I

私は突然に足を停めた。一体、何だらう？ 私は心の底の不安のようなものをつまようとして軽く首を傾けた。先程から歩きながらの間に次第に意識の裏側で拡がり始めていた曇り空のようなものが、強い衝動となって心臓に動悸を呼ぼうとする瞬間に、私は私自身のとりとめのない夢想から眼覚めた。そしてその同じ瞬間に私の不安そのものも捉えがたくどこかへ退いてしまった。丁度長い間掛けられてあった絵が取り去られた後の、そこだけが変に不自然に四角く白く浮き出た壁のように、また突然に退学した学生の席が、眼ざわりな程生なまとその不在の雰囲気を漂わせているように、私の心は先程までの何かが急に消え去った後に、名状しがたい深い匂いのような気配を拡げ始めていた。

私は立ち止ったままあたりを見廻した。足許から緩かな坂が次第に登って行く。真昼の翳のない日射しの中で、数十年の歳月に磨り減らされた、光っているために透明な程に見える石畳。その上には道の両側の石壁が狭いけれどもくっきりと碁盤縞の影を浮き上らせている。私の眼は先程から歩きながらこの景色を眺めていた。そしてそこから一種の不安を吸いこんだ。それははっきりと意識して正体を見窮めようとした瞬間に全ては漠然と消えてしまった。夢の中の人の顔を正確に突きとめようとすると、全てが失われてしまうように。……この何の生気もない、純粹に物ばかりで出来ている景色。光と石。人通りもなく人間的な連想を喚ぶ一切のものの欠けている視野。——私は知ら

ず識らずの間に、画家が画面の上で配置上行う、樹木の枝を勝手に刈り込んだり、背景を無造作に空一色に塗りつぶしてしまおうのと同じ操作を、現在の精神的雰囲気と調和させるためにこの風景に対して行っていた。坂の上に重なる街々は未来の遠くに無限に小さく見放され、今横切つて来たばかりの電車道は既に過去の中へ遜しやかに退いて行っていた。この非情な風景は、私と云う認識主体が消え亡せた後もなお、このまま白と黒の対照の中に静まり返っているのだからか？ それとも全ては闇の底へ崩れ落ちてしまうのか？ この単純な疑問が急に私の胸を冷くした。そしてそれこそ先程の不安を言葉に翻訳したものであると気付いた。勿論、絶えず育つたり凋れたりしている不安は、概念に置き換えられると同時に停止して、その気配のようなもの生気のようなものを失ってはしまふが。——何か喪失のような感情。それが先程からこの風景の前で私の意識の底から香の烟のように立ち昇っていたものに違いない。私が死んでしまつてもこの道は、相変わらず同じ白い太陽の下に同じ影を描いているのか？ しかし誰のため

に？ 私はいつの間にか歩き出していた。すると片側の石壁が突然に断ち切られたように一個所に穴を開けているのに気付いた。そこから鬱蒼たる茂みと裸の褐色の土とが、荒々しい対色で覗いている。私は死の想念から半ば無意識的に逃れようとして、石塊と丈高い雑草とを踏み分けて、石壁の中へ入って行った。そこには崩れかけた白いペンキ塗りのベンチが樹木の下に捨てられてある、永い間誰にも腰かけられたことのない、忘れられた無名詩人のような。私は新聞紙を拡げてその上に腰を下ろし、靴の先で地面を掘ってみる。踏みじられた草から、若い生命に満ちた匂いが立ち昇って来る。強く眼を射る、熱いような赤土の色。そして周りの林の地面に、野草や落葉や白い小花やの上に、黄色に葉洩れ陽の描く、豊かな濃淡の線の戯れ。印象派の画家達が光線を描いたとは、物の面に生の感情を発見したと云うことではないだろうか？……私の中には突然に、或る耳馴れた提琴協奏曲の旋

律が恢復して来た。

この曲調——明るく愉しく生の平和を謳いながら、淨福の階段を駆け上り駆け下りるこの主題。私はその流れの中に妨げるものなしに魂を溶かして行く。死の感情のために堰き止められていた内部の持続が、自然に奔放に遊戯のように走り廻る。それは敗退した不安の、限りなく遠ざかり行く、その後姿に対して、生の注せる典雅な祝祭曲。

花々の甦生した香りの中を、悔恨の叫びと共に逃れ行く冬の王の、背後から湧き上る復活祭の春の斉唱。匂う若葉、囀る小鳥、閃く白雲、幼児の明るい笑い声。全てがいつのまにか吹雪が桜と変るように、虚無の底から生れて延びて行く。——この旋律が最初に私の中に恢復したのは宿命的なあの日だ。そしてやはり突然に死から解放された瞬間だった。……それは私の生を支えていた最も大きな柱の遂に打ち折れた日。三月もの永い間、或いは恢復の偽りの微しを見せてはぶり返し、或いは絶望の淵の口もとまで行つては引き返し、揺れに揺れ、次第に激しくなりまさる嵐の中で、遂に一息に打ち倒れてしまった——父の死——それまで一瞬の休みもなしに私の心の底までも掻きたてていた、父の死に対する不安、もし父が死んだら私はどうしよう、もし父が死んだら父は虚無の底に沈んでしまうのか、もし父が死んだら父のしかけた全ての仕事は骨組のままに誰にも知られずに失われてしまうのか、もし父が死んだら父の開けた入り組んだ空洞を社会はどのようなに繕うのか、全てのそうした心配は父の死と云う事実の前に忽ち一掃されてしまった。

人の死は山奥の森蔭で死ぬ静かな動物の死とは異なる。それは煩雑な法律的経済的習慣的な社会機構を一時に恢復させる開幕の合図である。大病院で父の友人の白髪の教授が枕頭で敵かに頭を下げて呟いてから十分後には、私の周囲は慌だしい空気に満ち、よく顔も知らない父の会社の社員達が、或いは憂鬱な或いは元氣な顔で廊下を往来し始めた。すると今上海から飛行機で駆けつけたが五分違いで間に合わなくて残念だと歎声をあげた、あから顔の広川社長が、傍らの椅子に茫然

と坐っている中学生の私を見ると、ちよつと云つて指で合図して、例の事務的な調子で私を部屋の隅へ呼び、二三人の弁護士の名前を挙げた。私が見て、彼は急に快活な笑いを立て、死骸の傍らであることに気付いて、大きな手巾を口に当てて聲め面をした。

——いや、よろし、よろし、私が万事あんじよう致しますよって、坊んちは大舟に乗った氣でないはれ！ あ、山口君、お冷やを一ぱいよんでんか、いや、そのコップでええわ。大きに。

私にはこの脂ぎった大きな紳士の何を云おうとしたのか、また、父の死と弁護士とどう云う関係にあるのかが判らなかつた。ただ社長が上機嫌の時に濫発する大阪弁によつて、彼が陽気な気分の中にいると云うことを知つただけだった。傍らの私はこの有能な事務家の、周囲に振り撒く活気のある雰圍氣で忽ち愉快にされた。——これから、私、あなたの親代りだつせ。親代りだつせ。……

それから数分後の私は、この死の惹き起した寧ろ快活なくらいの組織の中に組み入れられて、大学の傍らの郵便局に私の家の私的な交際範圍へ父の計を報ずる電報を打ちに行くために、鋪道を急ぎ足で歩いてた。——坊んち、同文電報云わにやあきまへんで。よろしか、同文電報やで。……ばらばらと降つて来た氣紛れな雨のために、忽ちに眼の前の鋪道が濡れて行つた。その中を傘もささず、帽子も被らずに、小走りで行く私の心は、永い間の苦しい不安から今こそ決定的に解放されたと云う利己的な喜びのために、ほてつた頬にあたる冷たい雨滴も愉しく感じられた。その時、軽い足取りの間から、不意にこの提琴協奏曲の第一主題が溢れ出て来たのだつた。次第に茂くなりまさる兩足は、高揚して行く裝飾句と諧和し、傍らを大きな音を立てて市電が通り過ぎると、その直ぐ後から第二主題が火花のように生れて、心の地平に明るく大きく暁のように拡がって行つた。

父の死の直後に私の陥つたこの精神状態は、あらゆる私の予想を裏切つてた。父の瞑目、それと同時に私のしなければならぬ儀式的

な配慮、周囲の人々に対する挨拶、内気な私が想像するだに暗い気持ちになるそう云う外的な顧慮、そしてそれを押しつけてしなければならぬ嗣子としての私と、唯一人の愛するものを失った孤児としての絶望的な私との平衡の破壊。毎晩悪夢のように私を悩ましていたそうした心配は、広川氏の世慣れた采配できれいに一掃されてしまった。その上、私の生涯に於ける最も悲惨な瞬間をすでに経験してしまつたと云う不思議な安心。これは私が死の想念に包まれながら、何等の不安を抱かなかつた、最初にして唯一の時間だつた。

勿論私はそれまでに幾つかの死に立会つて来た。また死を予感させる幾つかの事件にも。先程道を歩きながら漠然と感じた奇妙な喪失感。人生の何でもないような日常の間に、白光の下の小砂利のようにきらりと閃いてまた消える意味深い瞬間。——それは私のごく幼い緑色の田舎暮しの間にも、すでに人生の無常さを予感させて幾度か私を脅かした。

その最初の死よりの呼掛けは一冊の本からであつた。生活の大部分を上海や大阪や東京やで暮している父親から、時々便りと一緒に菓子だの玩具だの、田舎では見ることに全くない、驚く程新型の洋服などが送られて来た。またこんな贅沢なもんを。費うことばうか考えて。……とその度に伯母は荷物の上包を手持つたまま溜息をつくのだった。「こんなハイカラな洋服を田舎で着て歩けすか。」そう云われると、私も吊紐つきの洒落た茶色の半ズボンに緑の縦縞の開襟シャツを着て、学校へ出掛ける勇氣はなくなつて来る。隣の豆腐屋の利いちゃが慌てて——今日は何かお式でもあるか？ とまた訊くかも知れない。この都会の子供の避暑地の軽装が、汽車の沿線から三里も入つた田舎の小さな町では、礼装のような晴がましい印象を与えるに相違ない。……しかし私は伯母にせき立てられてお札の手紙を書く。私が勝手な感想やら友人の話やらを書き始めると、伯母は覗き込んで注意する。伯母にとっては手紙はそんな饒舌ではない、きまつた様式のあるべきものである。伯母は父から私を預けられていて、決して盲目的に

甘やかしてゐるのではないと云う証拠、立派なしつかけの表現のお札の手紙に見せようと懸命なのだ。私は仕方なしに書き直す。私が最も悲しいのは、いつも父の葉書の終りに、何でも好きなものを云つてくれれば送って上げますと繰り返してあるのに、伯母は私の望みを書くことを許さないことだ。——これだけでも何百円ずらか判りやせんに、またねだつたら、お父つさは叱るに決つてらるよ。……それから伯母は神秘的な微笑をする。それは私にそれ以上の質問や抗弁を禁ずる、漠然とした不信任のような表情——自分の今述べた理由の拙さ、またそうした言葉を感じ悪い思いをして述べねばならないようになったその場の成り行きに対する、対象の不明瞭な怒り、無邪気な私に対する憐みともどかしさ、そうしたものの解きがたく纏れ合つた判りがたい眼差し。その瞬間に、常には私に限りなく近くあり、私自身と殆んど見分けることの出来ない伯母が、突然に私から離れ遠ざかり、私の理解を超越した一人の他人、私とは全く関係のない一人の大人となる。私は急に支えの手を離された幼児のように蹠きそうになる。

大都会の中で気楽なやもめ暮しを続けている父は、時々（一年に精精二三度）舞い込んで来る、無器用で無表情な手紙を見ると、自分に子供があると云う事実を、奇妙な驚きと共に想い出して急に陽気になる。それから百貨店へ出掛けて行くと、衣類から学用品から山と買い込み、いつも父の周囲にいる友人達も気紛れに菓子などを買って来て、その荷物の中に入れる。——この時ならぬ贈物はさぞ草深い田舎をびっくりさせるだろうよ。——いや、結城夫人のように、『奥さん、何か記念にお受け取り下さいませんか？』とこつちが出るのと『何でも？』と来るね。『はあ何でも結構です。私の心でも。……』『あら、そんなものが戴いても。今年の型のセダンのバックカード。それと。……』『いや、それだけで結構。とても私では、いっそ野々宮のじいさんにも御無心なさつては。……』『てな無器用なことになると、贈物もうっかり出来ないが。——そこで新劇俳優の原口氏が大きな包みにびっくりした田舎人の表情を方言混りにやってみせ、一同大

笑いの内に私の存在は消えてしまう。それから彼等は百貨店に横づけになってゐる浮田子爵の自動車にまたどやどやと乗り込むと、一晚を愉快に踊るために横浜へドライブするのだったに違いない。それから一週間もすると、伯母はまた大きな荷物を開きかけたまま歎息する。——「こんながんに洋服を一体この子一人で着れると思つてるからよう。一年もすりゃあ、はあ背と合わんようになるから。……そのくせすぐに着ようと云う私に反対して、勿体ながって仕舞ひこみ、着ないで小さくしてしまふことにするのは必ず伯母だつた。もつとも伯母にはこの大量の荷物が何を意味するのか全く判らなかつたのだ。それに時には父の友人達の一人が何を考え違ひしたのか、荷物の中からは女の子の服の出で来たことがあつた。私の名前の女らしさが誤解させたのかも知れなかつたが、伯母はこの乱調子な贈物に父親の愛情を見出せなかつた。伯母にとつては愛情とはもつと儉しやかなものであつたらう。この大量生産のどれにも七八歳用の児童夏服と云う紙札のついた、百貨店の衣類は余りにも空々しかった。父の発作的爆発性の父性愛は伯母には奇妙な嫌悪を呼び起し、父の都会生活に疑惑の眼を見開かせた。だが少年の私にはこの、年に二三度の贈物の雨は、東京や大阪や上海を宝物の咲き満ちた楽園のように錯覚させた。大きな自動車や電車の右往左往する大都會の上空に、モーニングを着た父親は大きく神のように立ち、周囲に友人達を天使の群のように居流れさせ、明るい電飾の広告塔を背景に、きらきらと閃めく星を、拡げた両手の先から降らしている。その星はそれぞれ万年筆であり三輪車であり玩具の汽車であり蓄音器である。

そんな包みの中から或る時数冊の本が出た。その中の一冊には紙が挿んであり、「この本はお父さんの友達の偉い小説家が子供のために書いたものです。今刷り上つたばかりの一冊をお前にと云つて持つて来てくれました。お礼の手紙をお出しなさい。」そして関西の住所と上村登志雄と云う名が書いてあつた。(関東大震災直後で文壇人も関西移住が多かつた。それに帝都復興のためと新企業を起すためにに灰

燼の東京を見捨てて一斉に大阪に走つた実業家の中で、父も最も敏腕な事業家の一人として、九月の下旬にはすでに徒歩で大阪に乗り込み、上海時代の取引先である広川氏を説いて、一旗挙げようとしていた。浮田子爵も葉山の別荘の倒壊で病中の夫人を失ひ、紀尾井町の邸はそのまゝにしておいて、幼い娘と生れたばかりの男の子とを伴れて、久しぶりに京都の邸へ戻つていた。また俳優の原口氏も一座を率いて関西を廻つていたし、画家の宮田氏も一時宝塚の装置家^{*}になつていたし、仲間の中心の結城夫人も神戸へ帰つていた。つまり父の交遊は社交界そのものの西漸と共に関西に移つていた。従つてこの時の包みも確か日本橋の三越や白木屋ではなく、心齋橋の大丸のだったに違ひない。その数冊の本の中でしかし私が一番気に入つたのは、上村氏の贈物よりも『千一夜物語』——豪華な絵入りの大型の書物——だつた。手に取ると直ちに判る高価な紙質の匂い、翻すとばりばりと音がして新しい頁がはがれ、クリーム色の地に赤と黒との二色で本文が刷つてある。そして美しい女王の微笑みを金色に冠せられた見事な絹のしおりが、頁の間に燃えるような緋色で挿まれている。いつの間にか指先についている金粉。そして怪奇なその内容は……大理石の大きな浴場の中で戯れている裸婦達。大きなマントを拡げて黒い空を飛んでいる悪鬼。馬や駱駝の間で熱心に話し合つている、ターバンを巻いた商人達。沙漠の緑地で午睡の夢に耽つている若い王子。峻しい岩山を伝つて宝石を運んでいる盗人の群。そんな幻想の大輪の花々に忽ちにして取り巻かれてしまつた私は、その晩からその強烈な匂いの奥で際限もなしにアラジンやシンデバッドに転生するのだった。

一体、私がこれらの最初の書物から学んだものは二つある。夢と人生。——この二つの主導調はやがて私の全生涯を昼と夜とのように交互に支配し、私の人格を奇妙に分裂させて行き、私の行動を夥の多いものにして行くのだが、最初にその二つのものの存在を意識したのはこの時だつた。『千一夜物語』を読み耽つていて私の陥る夢想状態は、それまでの日常生活からは全く関係がなく、それは退屈で狭くなる

しい単調な田舎暮しのはかに——そう日常生活を意識するようになったのは、その夢との対照によるのだが、即ち夢から醒めようとして突然に外部に対して新しく抱く嫌悪感によるのだが——精神の内部に輝くばかりの変転を可能とする領域が限りなく大きく開けていると云うことを、始めて気付かせてくれた。黄色い顔のアリ・ババは私の幼い魂の前にひょっくり立って大声に叫んだのだ。「開け、胡麻！」と。すると忽ち未知の扉が開き、私は私自身の内部世界に躍りこむ。そこには支那のような印度のような波斯のような異様に混り合った風俗が、胡弓や銅鑼の音の渦巻の中に明滅し、いつしか私は我を忘れてその無数の迷路の中を進んでいる。右の窓からは緑の鸚鵡が、左の窓からは長い辮髪の男が、「坊ちゃん、坊ちゃん、日本の坊ちゃん。」と呼び掛け、何とも云えない甘い花の香りが四辺に満ちて、眼の前を黄金の輿が静かに揺れながら通り過ぎて行く。その輿の簾の間から細い美しい腕が出ると、黒人の従者達の頭越しに私の足許へ何か光るものを投げてよこした。私は舗道の上に身を屈めて……「さかえ、さかえ。」疍高い現実の女の声が私の夢を二つに引き裂いた。——「何度呼んだら判るらかよう。この子は天狗にさらわれたみたいにぼんやりして。おっしいがさめっちゃまうじゃあないかい。」私は逃げ去って行く音楽や歓声を一瞬たりとも引き止めようとして耳を両掌で閉じながら、眼の前にふきんを持ったまま驚いたような焦ったような顔をして立っている太った伯母を、いつか怒りとも悲しみとも判らぬ表情で睨めつけ始めていたらしかった。——それは常に私の感情の拡大された鏡である伯母の顔付の急変によって忽ちに私の意識に反射して来たのだった。——私は初めて、与えられている現実そのものを不満に感じたりそれを改変しようとしたりする、つまり現在ここにある状態と比べて現在ここにはない状態に対する望みとか憧れとかを抱く、と云う傾向を覚えた。『千一夜物語』は私に夢を教えたが、それはやがて死をも教えることになった。或る朝、私は学校へこの本を持って行くこととして、本箱の中にそれがないということに気づいた。早速学校カバ

ンを調べ、机の上下を調べ、伯母にも訊いたが判らない。その時丁度学校へ行こうと毎朝の例で誘いに来た隣りの豆腐やの利いちゃに伯母は呼び掛けた。「利いちゃ。うちのさかえん色刷の大きな本を知らんかね。」利いちゃは往來に面した窓から顔だけ覗きこんで、「知らんやあ。」本当かえ。のう利いちゃ。誰にも云いつけやせんで、返しておくんない。あれはこの子のお父っちゃが大阪でわざわざ買って送ってくれた大事な高価い本だ。のう内証にしてやるで。色鉛筆一本やるで。のう……。「わしらはほんとに知らんにね。」利いちゃは伯母の口調に驚いて、急に丁寧な言葉遣いになると、学帽を被り直してこそそこそと逃げ出した。——うそは泥棒の始めと云うが、あの年で盗みを働いたりしっちゃあ、末は碌なもんにならんらよ。後で利いちゃん学校行つた留守に、家へ行って謙さにもう一べん訊いてみすよ。……私には何故伯母がこの本の泥棒として利いちゃを名指すことが出来るのか判らなかつた。今迄何度も私のところでこの本の挿絵を見たり筋を私から聞いたりしていたが、利いちゃの学力ではまだ到底こんな本は読めはしないのだ。それに隣家に住んでいて朝晩顔を見合せるのにそんなことが出来ようとは想像もつかない。一体、盗みと云うような乱暴な行為を、それまでは子供の私は自分の周囲で聞いたこともなく、出会つたことは更になかつた。泥棒と云えば大きな風呂敷を背中に負い、頬かぶりに尻はしよりと云う伝統的な映像しか眼に浮んで来ないのだ。

私には苦勞しつづけの一生を、この狭い田舎町に送って来た伯母の、些細なことで近所に疑いをかけたり、周囲の人の欠点を露いしたりするやり口が嫌だった。私自身に対してはあくまで寛大な伯母が世間に対すると突然に偏屈で醜惡な利己心を、時に私をぞつとさせる程示すのだ。幼い私はそう云う時に伯母に感ずる輕蔑、殆んど主人が目下のものに対して感ずるような貴族的な輕蔑をどうにもならなかつた。そうした感情は屢々父も伯母に対して抱いたらしかったと云うことは、その後私も気付いたが、伯母の方でもそう云う父には（小児の私

の大人の世界に、こんな波紋を捲き起したことに恐怖を感じると、裏口から家の庭へ黙って駆け込んだ。やがて隣家から帰って来た伯母は、縁先に腰掛けたままぼんやりしている私を見ると、いつものように唯今とも云わずにそっと帰っていたことに不思議を感じて、庭石の上に立ってちょっと私を見すえたが、やがてその泣きはらした兎のような眼は次第に焦点を私の顔から遠く屋根の向うへぼやかして行きながら、太ったつやのいい両手は前掛けの端をひき千切ればかりに強く揉んでいた。

『千一夜物語』は遂にこのようにして失われてしまった。私はその後本箱から本を出し入れの度に、その赤い表紙の大型の贅沢本を想い出した。伯母にとつてはこの本の失われたと云うことは、自分の家から隣家に移ったと云うことに過ぎず、それをもとのところへ返すように手配しないのは、謙さを苦しめることが可哀そうだと云う遠慮からだけであった。——「のう、さかえ、利いちゃん家はそりゃ貧乏家だ謙さ朝から晩まであんなに働いても皆借金の子や何かにやっちゃまうで。利いちゃんにも碌な本一冊買つてやれんずらで。のう堪忍してやんない。またお父ちゃんに買つてもらえばいいだで。」そして私の顔が泣き出しそりに變つて行くと、伯母は急に狼狽して、「そりゃ泥棒をするこたあいかんだがの。お前がどうしても取り返すと云いや警察で来て、謙さあ連れて行くことになるで。謙さあ真面目ない人だで、それにおかみさんを亡くした気の毒な人だで。のう堪忍しておやんない。」……しかし私は到頭声を上げて泣き出してしまった。私が悲しかったのは、だが本が隣家へ持つて行かれたと云うことではなかった。私は隣りを調べても出て来ようなどとは信じられなかった。そうではなく前の晩に見た夢を想い出したのだ。暗い底知れぬ谷間のようなどころを、無気味な風に吹き曝されて、あの赤い本が見るも無慚に引き千切れながら、一直線に墜落して行く。開いた頁は私があんなにも大事にしていたのに、皺だらけになりひたひたと鳴り、やがて虚無に呑み込まれてしまう。そして後には風の悲鳴ばかりが。……私は

喪失と云うことの本当の意味を知らされた。私の心には償いがたい空洞が出来た。一体、私達の手許にあるものが失くるとはどう云うことなのだろう。この瞬間がもし数日前の今頃ならば、まだあの本は私の前の机の上にあったのだ。そして私はそこに不思議な時間と云うものに初めて気が付く。この世のことは一度起つてしまえば何一つ取り返しはつかない。時間は遡れない。それは突然の啓示だった。伯母は喪失を位置の移動に置き換えて何らの不安を感じていない。しかし私は物が存在しなくなると云うことに初めて一種の形而上学的恐怖を覚えた。神隠しと云う言葉は私の感じたのと同じこの神秘的な恐怖感の、古代人の間に芽生えた時生れたものだ。そして道を歩いている母と子が突然により高度の次元の世界に引き裂かれる。子供は母の見える眼の前で、道の上から掻き消える。母親には泣き叫びながら次元に天の一角に遠ざかり行く幼児の音が聞えるばかりだ——と云う近代物理学者の次元の問題に関するこうした夢のような幻想も、昔ながらの人類の喪失に対する恐れ、足許に忽ち深淵が開いて呑みこまれてしまふと云う恐れ、科学的文学的な再現なのだ。あの本でさえ全く予告なしに見えなくなり得るからには、あの本を私に与えた父そのものも、いつ突如として消えてしまふかも知れないのだ。……最初の死よりの呼びかけが一冊の本から来たと云うのは以上のような訳からだった。

『千一夜物語』はそんな風にして、私の精神に夢——この宇宙の持続の中に我々の小宇宙を生きいきと彩るもの——及び、死——空虚感、一度夜空を染めた火花が、ふっと消えてしまった後の、儂なさから恐怖に至る様々の魂の度合——の領域をはっきりと切り拓いてくれたが、もう一冊の私の好きな本、『千一夜物語』の失われた後は急に私には貴重に思われて来て私の最愛の書になった『義経記物語』——すつきりとした紺の布表紙に源氏の紋章の笹龍胆を白く抜き、背に黄色で本の表題と上村登志雄と云う名が刷り込んである、そして枠入りの本文の所々に入れてある挿絵は江戸時代の初期に出た『義経記』の極

めて稚拙な、そして仄かに後の浮世絵を予想させているような挿絵が、異様に生きいきとした大きな表情の顔と、衣裳や調度の無頓着な時代錯誤とに新興市民階級の意気込みと憧憬とを無邪気に写し出しているのを、そのままここ三百年後の高度資本主義時代の市民貴族的な芸術家の趣味によつて複製されて挿まれていた——その本は、私に我の人生——様々な人間の欲望や悔恨や疑惑や決意やに満ちた、それぞれのかげ換えない一生が一つに緋い合わされて出来ている複雑な束——を教えてくれた。気象学の研究のために低速度に撮影された雲が、銀幕の上で虚無の中から数瞬の間に生れ出て、刻々と形と大きさを換え、光と陰との限りない予想外の転調を行いながら、また数瞬のうちには死んで行き、後には最初と同じように無愛想な丘の起伏だけが残される。——丁度そんな風に、その書物は僅か三時間の読書時間のうちに、源義経の出現と消滅とを圧縮していた。現実には決して見られない雲の瞬間的な激しい変貌は、観客の胸を不思議な息苦しさで誘うのだが、三時間の一生は私に眼の前では少しも動いているようには見えない人生と云うものの、異様に深刻な変転の縮図を描き出してくれた。開巻第一頁で、雪の中に彷徨う若い母親の懐で眠っている幼児は、間もなく浮島原の青葉の下で頬を薄緑に染めながら、勇ましい兄の前で嬉し涙に咽んでいる。それから一時間の後には永年の戦塵に汚れた顔を物思いに贅らせながら、彼は敷物の上じっと動かずに石のように坐った儘でいる。腰越の宿でこの武將は恐らく生涯の絶巔の稀薄な空気の中に、前後に類のない苦しい闘いを魂の内部で闘っていた。一時間前にはあのように純粹に喜んで協力を誓った兄が、今では全てを忘れて一個の老獮な政治家となり果て、ただ弟を遠ざけ亡ぼすことばかりを考えている。それは複雑な利害の絡りの結果であつて——つまり人生そのものの駆引きであつて——個人の誠意や正義感ではどうにもならない。頁の上に暮れかかる夕暮れの影のために、字が見えにくくなって来たので、腕を伸して窓の障子を開けると、頁が薄黄色に明らんで丁度三十分程先にそうであつたと同じ程度になる。そ

れは時間がそれだけ程逆戻りしたような錯覚を私に与える。その時間の外に漂い出たような感じはそれだけで奇妙な儚さを惹き起す。奥羽下りの淋しい主従の後姿を見送りながら、暖かい物の匂いの漂っている夕方の空気の中に、伯母が畳を掃いている隣りの部屋の箒の音が妙に心にしみじみと生活の悲しみのように聞えて来るのを、横になつて頬杖をついてぼんやり耳の端に意識して、私は読書の中絶したままで、ぼんやり物思いに耽りはじめていた。人間の真情と云うものは、人生の残酷な機関の中では余りにも傷つきやすく痛みやすいものなのだ。そしてそれにも拘わらず人はこの人生の中を生き抜いて行かなければならない。今は幼い私も、知らぬ間に時間が経って大人になると、自分一人で何でもしながら生活を立てて行かなければならない。私はこんな人見知りをする内気な子供だと云うのに。……

この現代作家によつて再述された古い軍記物語の惹き起した純粹な感動は、私にとって最初の文学的諧和感であつた。従つて文学に対する趣味を——この場合の文学は、広く歴史伝説民話等を含んでいゝる、即ちそうしたものの分化する以前の古代人風の自然発生的な文学に對する感じ方であるが、そして全て個人が発生する場合、全生物の進化過程を胎内において経過するように、全人類の精神史をもまた幼児期において通過するのだから、例えば最初に幼児によつて描かれた錯画期の絵は、フォン・ド・ゴームの洞窟中の牛の絵と実に様式的に類似している——呼び起してくれた作家の上村登志雄は、私にはその後変らぬ特殊の愛情の對象となつた。胸に豊かな白髯をたくわえ、古風な羽織袴で、嚴肅な顔をしてお寺の書院に端坐して筆を執っている清潔な老人。周囲にはきちんとした和綴の本が積まれ、盆の上には大きな湯呑。——私はそんな人物をこの書物から想像した。

けっこうな御本を本とうに有がとうございました。

さっそく読んで義経を勇ましくまた悲しいと思ひました。

頼朝は兄のくせに何と云う悪者でしようか。私は義経がかわいそう